

## 「神が私たちとともにおられる」

マタイ 1 : 1、5 - 6

鄭 ヒムチャン

おはようございます。アドベント第4週、いよいよ来週はクリスマスを迎えます。待ち望むこの時、今朝は救い主イエス様がこの地に来られるために道備えをした人々の姿からともに学んでいきたいと思えます。

**1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。**

**1:5 サルマがラハブによってボアズを生み、ボアズがルツによってオベデを生み、オベデがエッサイを生み、**

**1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。**

新約聖書のはじまりマタイによる福音書の第1章にはイエス・キリストの系図が記されています。ここに書かれている一人ひとり、救い主の道備えをした人々です。今日はその中からルツ記をともに見ていきたいと思えます。

### 1. 見えないけれど確かに導かれる神さま

#### ルツ記 1:1

**さばきつかさが治めていたころ、この地に飢饉が起こった。そのため、ユダのベツレヘム出身のある人が妻と二人の息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。**

ルツ記は「さばきつかさが治めていたころ」という書き出しから始まります。この言葉は短い言葉ですが、このルツ記全体の時代背景を鮮明に映し出しています。「さばきつかさ」と書かれています。これはルツ記の前にある士師の時代を表している言葉です。士師の時代、それは人々が、社会が荒れている時代でした。士師記を全体通してこだまのように語られる一つのことばがあります。ちょうどルツ記 1 : 1 の前にある、士師記の最後のことばがまさにこのことばです。

**士師 21:25 「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。」**

士師の時代、それは国を導く王がいなかった時代です。イスラエルの秩序は乱れ、人々の求めること、判断基準はばらばら、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていました。そん

な暗い、荒んだ時代、ユダヤの地に飢饉が起こったのです。社会情勢が不安定だけでなく、食べるものがないという危機的な状況まで重なるという苦境です。ルツ記のはじまりは、苦しい社会情勢、苦しい飢饉の中で生きるために住み慣れた故郷を離れた一つの家族の姿を記しています。

**1:1 さばきつかさが治めていたころ、この地に飢饉が起こった。そのため、ユダのベツレヘム出身のある人が妻と二人の息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。**

**1:2 その人の名はエリメレク、妻の名はナオミ、二人の息子の名はマフロンとキルヨンで、ユダのベツレヘム出身のエフラテ人であった。彼らはモアブの野へ行き、そこにとどまった。**

イスラエルのベツレヘムにいたユダヤ人の家族、エリメレクの一家が飢饉に耐えかね移住を決意します。エリメレク一家が出てきたのはユダのベツレヘムです。ベツレヘムを日本語に訳すと「パンの家」という意味になります。パンの家にパンがない。何という皮肉でしょう。元来ベツレヘムは肥沃な土地に恵まれ、多くの作物が育つ豊かな地です。しかし、そんな豊かな姿はもはやその時のベツレヘムにはありませんでした。エリメレク一家が滞在の場所として選んだのは隣国モアブの地でした。このモアブの地はイスラエル人にとっては関わりをもってはならぬ異教・異邦人の地でした。しかし、そのモアブの地にとどまったところに、何とかして生きていかなければという苦渋の決断が伺えます。

助かるために行った地で待っていたことは予想だにしない悲劇でした。家長エリメレクが死んでしまうのです。それでも妻ナオミ、そして二人の息子はその地で生き続けます。そして息子二人はモアブ人の女性と結婚するのです。オルパとルツです。しかし、悲劇は続けて起こります。この二人の息子たちもまた死んでしまうのです。なんと男たち3人は皆亡くなってしまい、女性たちだけが取り残されてしまうのです。ナオミ、オルパ、ルツこの三人は皆夫を失うという言葉にあらわせない悲しみに突如襲われたのです。

言葉にならない悲しみだけではなく、これから先どう生きていけば良いのか途方に暮れていたでしょう。そんな中ナオミは故郷のベツレヘムの地に再びパンが与えられたという知らせを聞き、帰郷を決意します。そしてナオミは二人の嫁と一緒に旅立つのですが、その途中でオルパとルツに自分の故郷へ戻るように伝えるのです。

**1:8 ナオミは二人の嫁に言った。「あなたたちは、それぞれ自分の母の家に帰りなさい。あなたたちが、亡くなった者たちと私にしてくれたように、主があなたたちに恵みを施してくださいますように。」**

**1:9 また、主が、あなたたちがそれぞれ、新しい夫の家で安らかに暮らせるようにしてくださいますように。」**そして二人に口づけしたので、彼女たちは声をあげて泣いた。

これはオルパとルツのためを思ってのことだったでしょう。夫に先立たれた若い二人に生涯一人でいてほしくはない。特に当時の男性優位社会において、女性一人で生きていくことの大変さ、

今とは比べ物にならないほどの困難であったはずですが。そんなことには決してさせたくない。強い思いです。同時にオルパとルツはモアブ人、つまりナオミの故郷ベツレヘムにおいて彼女たちは人々の蔑みの対象になる異邦人なのです。彼女たちをベツレヘムに連れて行った先には彼女たちの苦しむ日々があることも案じていたでしょう。それ故、ナオミはオルパとルツにモアブへ帰るよう必死に説得します。しかし二人とも泣いては、離れないと拒みます。必死の説得にオルパはモアブへ旅立ちます。しかしルツはどれだけ説得しても、決してナオミを離れることをしませんでした。

**1:16 ルツは言った。「お母様を捨て、別れて帰るように、仕向けないでください。お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」**

**1:17 あなたが死なれるところで私も死に、そこに葬られます。もし、死によってでも、私があるから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように。」**

「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」おそらくルツはナオミたちとモアブで暮らしながら、イスラエルのまことの神様を信じるに至ったのだと思います。またルツはこうも言いました。「あなたが死なれるところで私も死に、そこに葬られます。」私は骨になってもあなたと一緒にいます。死んでも離れません。固い決意です。こうしてナオミとルツはともにベツレヘムに戻ったのであります。

飢饉のためにかつてベツレヘムを離れたナオミ、どれほど帰りづらかったらうかと想像します。ベツレヘムの同郷の人たちからは、故郷を捨てた裏切り者だと思われていてもおかしくありません。

**1:19 二人は旅をして、ベツレヘムに着いた。彼女たちがベツレヘムに着くと、町中が二人のことで騒ぎ出し、女たちは「まあ、ナオミではありませんか」と言った。**

ナオミが故郷ベツレヘムにもどったときです。久しぶりに帰ってきたナオミをみて、町中が騒ぎ出しました。そしてナオミのことを知っている女性たちが彼女に声をかけたのです。「まあ、ナオミではありませんか。」16節ではルツがナオミのことを「お母様」と呼んでいます。おそらくナオミは久しく「ナオミ」という名前では呼ばれていなかったのだと思います。そんな中久しぶりの故郷に戻り、知っている懐かしい女性たちに出会ったとき、突然長らく呼ばれていなかったナオミという名前と呼ばれたのです。「まあ、ナオミではありませんか。」「ナオミ」その名前の意味は「快い、楽しみ」です。ナオミ（楽しみ）という名前を聞いて、彼女はこう答えます。

**1:20 ナオミは彼女たちに言った。「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。」**

彼女は自分の名前が自分に語りかけているその皮肉なこと、楽しみとつけられた自分の名を聞いた時「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。」と言います。マラとは苦い、苦しみという意味です。「”楽しみ”だなんて冗談言わないでほしい。”苦しみ”と呼んでください。」ナオミは命からがら食糧を求め、故郷を旅立ったものの、その地で得たのは夫と二人の息子の死という絶望でした。ナオミ「楽しみ」と呼ばれるのはしんどかったのです。

そして言います。

**1:20 後半-21 節「全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。私は出て行くときは満ち足りていましたが、主は私を素手で帰されました。どうして私をナオミと呼ぶのですか。主が私を卑しくし、全能者が私を辛い目にあわせられたというのに。」**

ここからまたナオミの隠すことない素直な思いを知ることができます。ベツレヘムから出ていくとき、彼女は満ち足りていたのです。しかし、今私は素手だと言います。今私は空っぽ、もう何もない、すべてを失ったのだということです。そしてその理由を神様がそうしたのだと言うのです。神様が自分のすべてのものを取り去り、このすべての苦しみを神が与えられたと嘆いているのです。自ナオミは今神様を恐ろしい裁きの神と感じているのです。神様が本当にどのように自分の人生に関わっておられ、どのように働いておられるのかがわからないからなのです。

ルツ記の大きな特徴は、神のことばである聖書なのにも関わらず、神様の存在、神様の御手の働きがほぼ記されていないということです。ルツ記の中に神様が何かをされたという言葉は、「**主がその民を顧み**」(1:6)、「**主が身ごもらせたので**」(4:13)のたった2回のみです。神様の臨在、導き、働いておられる神が見えないのです。

それでも良いのかと問いたくなりようなルツ記の特徴ですが、よく考えてみるとこのルツ記の特徴はまさに私たちの日々の生活そのものではないかと思うのです。私たちは神様を目で見ることができません。神様が今どのように働いておられるのかも私たちははっきりと確認することはできません。それどころか時に私たちは苦しい出来事の中で、神様は私を見捨てておられるのではないか。神様は何もしてくださらないではないか、神は本当におられるのかと疑いを持つこともあります。神様は私たちを放任しておられ、人の罪故に災いと裁きのみをくださる方なのでしょうか。いや、私は空っぽなのですと神がそうされたのですとつぶやくナオミ傍らで、ルツ記はこう続きます。

**1:22 こうして、ナオミは帰って来た。モアブの野から戻った嫁、モアブの女ルツと一緒にあった。ベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れが始まったころであった。**

自分の今日までの日々を嘆き、悲しんでいるナオミ、その悲しみは深い悲しみです。神様は何故彼女を顧みてくれないのか。神はどこにおられるのか。そう問いたくなります。しかし、聖書は語るります。「ベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れが始まったころであった。」

空っぽなナオミ、悲しみに伏しているナオミ。しかしそのナオミを取り囲んでいる景色はどんな景色でしょうか。ナオミから視野を広げた時何が見えてきたでしょうか。ナオミが今立っているベツレヘムはまさに大麦の刈り入れが始まったころでした。

久しぶりに踏みしめた故郷の地にナオミは言葉にならない悲しみで立っています。素手にされた、空っぽのナオミです。しかしすべてを失ったナオミの周りに広がる景色は、それとは対照的です。大麦の刈り入れが始まった、収穫の季節です。ナオミとルツの新しいスタート、彼女たちが再び満たされていく始まりの景色です。ここに見えない、しかし確かにナオミとルツのために働いておられる神様の御手の働きがみえてこないでしょうか。

私たちが生きている日常もナオミやルツのように、神様の見えない日々です。そしてそれぞれが立ちはだかる困難の前でただただ必死に生きている一人の人間です。ときには日常なかで起きる苦しい出来事に打ちひしがれ、神様は本当におられるのか、神様がにおられるならなぜこのようなことが起きるのかと怒りが湧いて来るときだってあります。しかし、ルツ記はこんな私たちに別の視点を与えてくれるのです。私たちの人生には苦しみがある、言葉にならず呻くような日々もある。しかしこんな私の日常の中に実は見えないけれど確かに私を導かれようとしておられる方がいる。そのことを覚えたいのです。

## **2. 知っておられる神様**

大麦の刈り入れが始まったベツレヘムにルツは落ち穂拾いに出かけていきました。当時のイスラエルには貧しい者と在留異国人のために定められていた落ち穂拾いの制度がありました。ルツもこれに期待して、食料を確保するために出て行ったのでした。そんな中不思議な導きでルツは偶然ナオミの夫の親戚のボアズの畑で落ち穂を拾うことになります。ボアズはその町の有力者でした。ルツが落ち穂拾っているとちょうどボアズは自分の畑にやって来て、ルツを見つけ、周りの者にこの娘は誰かと聞きます。ナオミと一緒にモアブから戻ってきたモアブの娘ルツだということを知るのです。これは「図らずも」であり、意図したことはありませんでした。しかし神様の時にルツはボアズと出会うことになりました。

ボアズはルツのところに行って、自分の畑の刈り取りと一緒に連れて行って落ち穂拾うように伝えました。さらにはそのためにボアズはルツが拾うことから邪魔することのないように事前に畑の働く者たちに伝え、喉の潤すために水を用意しました。それだけでは終わりません。収穫の合間の食事の時間になると、働き人の輪にルツを招き入れ、余るほど十分な量の食事を差し出します。ルツが食事を終え、落ち穂を拾いに再び出かけると、今度はルツの自尊心を守るために彼女が知らないところで、収穫した束の間でも落ち穂を拾わせるように若い者たちに伝えるのです。さらにはわざと束から穂を抜き落として多くの麦を拾えるようにしました。

**2:17 こうして、ルツは夕方まで畑で落ち穂を拾い集めた。集めたものを打つと、大麦一エパほどであった。**

ルツが一日終えて集めた麦は1エパ、なんと17キロです。今日一日の糧を得るために落ち穂拾いにでかけたルツは1日で1ヶ月ほどの食料を手にして帰るのです。しかもそのことをナオミに伝えたと、その畑の主人ボアズは彼女たちの親戚であり、ナオミとルツの家を絶やさないようにする責任のある人の一人だということがわかったのです。驚くようなことが起きました。ルツ自身が一番驚いたことでしょう。実際ルツは驚いて落ち穂拾いの途中、ボアズに何で自分にこんなにも優しくしてくれるのですかと尋ねています。

**2:10 彼女は顔を伏せ、地面にひれ伏して彼に言った。「どうして私に親切にし、気遣ってくださるのですか。私はよそ者ですのに。」**こう述べたルツにボアズはこう語りかけます。

**2:11 ボアズは答えた。「あなたの夫が亡くなってから、あなたが姑にしたこと、それに自分の父母や生まれ故郷を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私は詳しく話を聞いています。」**

**2:12 主があなたのしたことに報いてくださるように。あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。」**

ボアズはルツのことをよく知っていました。またルツがナオミにしたこともよく知っていました。そしてルツの助けになりたいと願っていたのです。ルツはおそらく自分のことを誰も知らないと思っていたと思います。10節で彼女が言った「私はよそ者ですのに」という言葉からもその思いが伝わってきます。この町でルツは異邦の地モアブの野から来た部外者、よそ者だったのです。ルツ自身がそのことを身にしみて感じていたのだと思います。しかし、そのよそ者を知っていたボアズがいました。

私たちが日常の中で自分を「よそ者」だと思ってしまうことはないでしょうか。目まぐるしく変わっていく時代の中で、どこか自分だけが一人置いてけぼりされているような寂しさを感じることはないでしょうか。時にはその思いが嘆きになって「どうせ自分は…」 「私なんて…」 「結局人生こんなものなんだ…」 と卑屈な思いになることはないでしょうか。ある時は怒りに転じて、「あの人は幸せで輝いている日々を送っているように見える、なのに何で自分はこんなにも苦しくて、つらい思いばかりしながら毎日をすごさなければいけないのだろう」と嫉妬や理不尽さを抱える時はないでしょうか。自分はこの世界で「よそ者だ」そのような孤独を覚えてはいないでしょうか。

今日「よそ者」だと思っていたルツのもとにボアズはやってきました。彼はルツのことを知っていました。彼はルツを助けてくれました。ボアズという名前の意味は「力ある者」です。

自分のことをよそ者だと思っていますか。「どうせ私は…」 「何で自分だけ！」 そのような寂しさ、怒りが心の中にあるのでしょうか。自分は一人ぼっちだ。孤独だ。そう思いますか。



いいえ。実は私たちが気づいていないだけで、私たちのそばにも力ある方がおられるのです。すべてのこと知り、すべてのことができる神がともにおられる。誰も私のことを知らないと思えるようなときも、あなたのことを誰よりもよく知っておられる方がいます。

### 3. じっとせず、働かれる神様

ルツはこのあとボアズの親切により、麦の刈り入れが終わるまで落ち穂を拾い続けることができました。この経緯をずっと見守っていたナオミはある日、ルツに驚くような提案をします。ボアズに結婚を申し込むようにと言うのです。しかもその方法はとても大胆なものでした。

ある晩ルツはボアズがいる麦打ち場に行きます。ボアズはそこで麦をふるい分けていましたが、夜が更けるとそこで眠ってしまいます。ルツはナオミに教えられたとおりにボアズの足元に横たわりました。夜中にボアズは目が覚め、隣に誰かが寝ているのを見つけ、驚いて「お前は誰だ」と尋ねます。するとルツは結婚による庇護を求めました。

ルツの勇気のある告白、そしてナオミを守ろうとする誠実な姿にボアズは喜んで結婚を受け入れました。しかし、この時二人が結婚するにおいて一つの壁があることが発覚します。ボアズよりもさらに近い親戚がいることがわかるのです。しかし、ボアズはこのすべてことを自分が進めるから、任せるようにとルツに伝えるのです。そして、ボアズはナオミのもとに帰る時にお土産をもたせます。

**3:15 「あなたが着ている上着を持って、それをしっかりつかんでいなさい」と言った。彼女がそれをしっかりつかむと、彼は大麦六杯を量り、それを彼女に背負わせた。それから、彼は町へ行った。**

**3:16 彼女が姑のところに行くくと、姑は尋ねた。「娘よ、どうでしたか。」ルツは、その人が自分にしてくれたことをすべて姑に告げて、**

**3:17 こう言った。「あなたの姑のところに手ぶらで帰ってはならないと言って、あの方はこの大麦六杯を下さいました。」**

ボアズはルツがナオミのもとに帰る時に麦を6杯包んで渡します。ここにはボアズが送っているメッセージがあるように思えます。2つのメッセージです。まず一つ目、17節でルツはボアズが麦を包んでくれた時、ボアズが言っていた言葉をナオミに告げます。17節「あなたの姑のところに手ぶらで帰ってはならない」このようにボアズは言いました。ここに書かれている、「手ぶら」という言葉、これは先程呼んだ1:21においてベツレヘムに戻ったナオミが、「主が私を素手で帰されました」と言った時と同じ「素手で」という言葉なのです。ボアズは言うのです。あなたの姑ナオミを素手にはさせない。ここにナオミの「素手」の日々は終わるというメッセージが込められていると思うのです。これからは満たされた日々があることが告げられているのです。

2つ目は「6杯の麦」です。先程前の章では麦の量を表すためには「エパ」という単位を用いていました、しかしここに来て「杯」へと変わっていることは少し不自然に感じます。おそらく考えますに、ここにおいてはボアズはこの「6」という数字を意味をこめて、メッセージを送っているのではないかと思うのです。私は聖書の中に記されているあらゆる数字に意味付けをしようとは思わないのですが、この箇所における書かれ方には意味があるのではないかと思います。

イスラエルの民たちは数字に固有の意味をもたせていました。代表的なのは7です。完全数7です。天地創造の完成は7日目に告げられ、そして7日目は安息の日となりました。7は安息を表す、完成の数字です。ならば、6は何を意味しているのでしょうか。否定的に考えれば、7から1足りない「不足」を示していますが、しかし、別の考え方もできます。それは完成の7にたどり着く「一歩手前、最後の段階」だという意味です。ボアズがわざわざ麦を6杯量って渡している理由はこれだと思うのです。「私がすぐにこのことを解決しよう。絶対遅くはならない。すぐに行く。」その約束ではないだろうかということです。

この経緯を聞き、6杯の麦を受け取ったナオミはルツに言います。

**3:18 姑は言った。「娘よ、このことがどう収まるか分かるまで待っていなさい。あの方は、今日このことを決めてしまわなければ落ち着かないでしょうから。」**

あなたは待っていなさい。ナオミは言います。「ここからあの方がすべてのことをしてくれる。私たちが落ち着くために、ボアズあの方は落ち着いておられない。私たちはただじっとしていきましょう。じっとしていない方がいるのです。あの方に任せましょう。」

ナオミは今、力あるボアズを心から信頼して、待っています。この姿に私たちは待つことはどういうことか、待つことの価値を教えられるのです。今日みことばから私たちが教えられることは力ある方に任せるという待ち方です。必ず成し遂げられると信じているから待てるのです。神に不可能なことはないと私たちが信じるなら、私たちの未来はもはや私たちの力で解決しなければならないものではありません。神様がなされるのです。私たちのために神がじっとせず、落ち着かず、わたしのために働いてくださる方がおられるのです。私たちにできることは、僅かなことです。ナオミとルツがボアズにすべてを委ね身をまかせたように、わたしたちのために落ち着かず働いておられる神様を信じ、身を委ねて待つことです。

#### **4. 私たちの人生にご計画をもっておられる神様**

ボアズは約束通りすぐに街の広場に出ていき、法に則って正式にルツとの結婚を成立させます。ボアズがかつて送ったメッセージの通り、約束の成就是素早いものでした。ボアズはルツを迎え、彼女は彼の妻となりました。



**4:13 ポアズはルツを迎え、彼女は彼の妻となった。ポアズは彼女のところに入り、主はルツを身ごもらせ、彼女は男の子を産んだ。**

そして二人の間に子が生まれます。ここに来てルツ記は今まで語らなかった神の御手の働きをはっきりと記します。「主はルツを身ごもらせ、彼女は男の子を産んだ。」この男の子を与えたのは神であるのだということです。ベツレヘムの地に一人の男の子が誕生したのです。今までルツ記において見えなかった神様の存在。しかし神様がどのようなご計画を持っておられたのかがはっきりしてきます。

**4:17 近所の女たちは、「ナオミに男の子が生まれた」と言って、その子に名をつけた。彼女たちはその名をオベデと呼んだ。オベデは、ダビデの父であるエッサイの父となった。**

私たちは驚きの結末を知ります。生まれて来た子は、なんとイスラエル王ダビデの祖父であったということです。オベデが生まれてからはるか後の日、このベツレヘムにまた一人の赤ん坊が生まれます。彼はオベデの子孫、ダビデの子孫として生まれました。イエスキリストです。

**マタイ 1：1、5－6**

**1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。**

**1:5 サルマがラハブによってポアズを生み、ポアズがルツによってオベデを生み、オベデがエッサイを生み、**

**1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。**

私たちがルツ記を最後まで読んで思うことは、人間の思いを遥かに超える神様の偉大な計画があるのだということです。私たちの想像を超えて遥かに偉大なことです。神様は救い主の誕生を備えられるためにナオミとルツを用いられたのです。

子供の頃、父と囲碁を打つことがありましたが、打つたび手も足も出ませんでした。ハンデをもらって石をいくつも置かせてもらうのですが、それでも全然勝てないのです。父の打ち方と自分の打ち方が違うのだろうかと考えると、父の打つ手はその局面を切り開くと同時に、その一手が後に効いてくるんだということでした。おぼろげにわかってきたことは父は私よりもはるか先、何手も先を読んで打っているということです。読みが違うのです。神様の読みは無限です。神様の視点は現在からはるか先、終わりにまで伸びているのです。神様は今も働いておられ、今も一手一手を打っておられます。そして、その神様の一手というのは最善の一手です。そして神の一手は今だけを乗り切るためだけの一手なのではない。今を切り開く見事な一手でありながら、その一手は同時に終局に繋がっているのです。

ナオミとルツのつらく苦しい日々は何故なのかと問いたくなるものです。しかしすべての過程を経て神様はルツを身ごもらせました。苦しみも含めすべての過程はオベデを産み、救い主の道備えをするために用いられたのです。私たちも苦しみや痛みの日々の中で何故なのかと問いま  
す。そんな時には思い出してください。神様は苦しみさえも益として用いられるのです。

ルツ記を通して、見えないけれど神が私たちの人生に確かに関わっておられることを確認しました。見えないけれど、確かに私たちを導き、私たちのことを誰よりも良く知っており、私たちのために働いておられ、そして私たちの人生にご計画を持っておられる。神様は善いお方です。

クリスマス生まれたイエス様、その名はインマヌエルとよばれました。インマヌエルとは「神が私たちとともにおられる」という意味です。クリスマスにこの地上に来てくださった救い主は私たちとともにおられる神です。見えないけれど、今もともにおられます。

< 祈り >